F-4　「よく食べる」構文における「が/を」交替の検証

平田　裕 (立命館大学 言語教育情報研究科)
yuhirata@fc.ritsumei.ac.jp

1. 本発表の論点 （以下，本発表での主張や観察から分かることなどを，合わせて(CL 連番)と書く(<claim)。）

(CL1) “「よく食べる」構文”では，一般的な他動詞文でも「が/を」交替（ガ格目的語）が可能な場合がある。

(CL2) 上記の現象の成立条件は，頻度・量・比較などの副詞句（または付加要素）によって出来事全体の状態性（状況性，習慣性）が高まることである。（必要条件で，十分条件ではない。）

➡ 「よく食べる」構文のガ格目的語成立には，他動詞以外の副詞句などが作用している。
（「他動詞によって目的語の格が決まる」とする文法理論に反する現象。）

(CL3) 目的語以外に使われる助詞に対しても，状態性が高まることでガ格が可能になる場合があり，「よく食べる」構文と同様の現象だと考えることができる。（「よく食べる」効果）

➡ 「よく食べる」効果により，ガ格との助詞交替現象を統合的に説明することができる。

2. 先行研究における「が/を」交替

◆ これまでの研究は，現代日本語において「が/を」交替（ガ格目的語）が可能なのは以下の例のような特定の構文であるとしている（Shibatani 1975, 柴谷 1978, 藤村 2009 など）。
一般的な他動詞文での「が/を」交替は指摘されていない。

(1) 願望形:　水 が/を　飲みたい。
(2) [欲しい]: 水　が/を　欲しい。
(3) 可能形: 太郎は ロシア語 が/を 読める。
(4) [出来る]: ロシア語 が/を 出来ること
(5) [分かる]: ロシア語 が/を 分かる人
(6) [好きだ]: きみ　が/を　好きだ。
(7) [嫌いだ]: 魚　が/を　嫌いな人
(8) 例外的格付与: マリーはジョン が／を　格好いいと思っている。（ヲ格が例外的）

◆ 柴谷(1978, 236)は述語の状態性から「が/を」交替の規則化を試みている。(例外的格付与以外)
(9) 直接目的語助詞規則: (ア) 状態述語と共起する直接目的語に「が」を付加せよ。（イ）直接目的語に「を」を付加せよ。（但し，既に直接目的語助詞規則が適用されている場合には随意的。存在の述語その他のある述語を含む文には不適用。）

◆ 藤村(2009)は Hopper and Thompson (1980)による他動性仮説（Transitivity Hypothesis）を元にした説明を行っている。

(注)これまでの研究は「が/を」交替が見られる構文の中でも特定のものに絞ってその成立条件や容認度の違いを検証している。生成文法の枠組みでは Takano (2003), Takahashi (2010)など，ネット上の用例や大規模コーパス，容認度実験を元に容認度を考察したものには菅井・成瀬（2006)，藤村(2009)，南部智史（2014）などがある。

3. 「が/を」交替と DOM の違い

◆Differential Object Marking (DOM) (Bossong 1985): animacy/definiteness (有生性/定性)などの要因によって目的語が 2 つのグループに分かれ，一方は明示的な格表示をされ，もう一方は格表示されない現象（Malchukov 2008 など参照）。Comrie (1989)は，animacy/definiteness の影響をその 2 つの組み合わせによる markedness (有標性)によるものであると説明している。

(10)

	DOM	「が/を」交替
述語部	他動詞（主語/目的語があるもの）	状態述語（願望形/可能形/好き等）
影響要因	名詞句(主語/目的語)の(相対的な)属性の問題 有生性/定性 → 有標性	述語の属性の問題 状態性，他動性
	➡ 人/物の関係性の捉え方の問題	➡ 出来事(述語)の捉え方の問題
格表示	表示なし vs. 明示的表示あり	ガ格(主格) vs. ヲ格(対格) （ガ格はほぼ容認。述語との間に距離があると容認度が下がる。）

(注)DOM は多くの言語で見られるが，直近の LSJ 学会発表ではフィンランド語の研究や（梅田 2017)，日本語の方言での指摘（下地 2016)がある。

☑**(CL4)** 日本語の「が/を」交替は DOM と違う現象であり，日本語における述語と格関係（ひいては格表示のメカニズム）や格助詞の機能を考察する材料ともなる。（下の(注)に示すように，「が/を」交替は現代日本語だけの現象ではなく，古典語にも見られる。）

(注) 渋谷 (1993, 164)がまとめた表によると，可能表現の対象語に対して格表示が確立してきたのは中世以降と考えられる。調査対象資料において助動詞(ラ)レルの場合は中世でガ格 20 例に対してヲ格 1 例，可能動詞の場合は江戸語においてガ格 6 例に対してヲ格 1 例となっており，古典語にも「が/を」交替があったことが分かる。渋谷はヲ格表示の伸張についても議論している。

(注) Hirata (2002)は願望表現における対象語の格表示の歴史的変遷について考察している。源氏物語における「V まほし系」の表現には，【表示なし・属格「ノ」・対格「ヲ」】という交替が見られる（副助詞は除く）。中世以降は「V たし」が広まり，その【が/の vs.を】交替について松村 (1957)は資料のジャンル別の分析を行っているが，方言上の理由も考えられる。

4.「よく食べる」構文：他動詞の「が/を」交替

（以下，他動詞ではヲ格はほぼ容認されるので，例示しない。）

（注：前提）助詞の交替現象については容認度に個人差が出ることが多いが，特に本発表で扱う願望形・可能形以外の他動詞文での「が/を」交替は基本的には容認されないものであり，本稿の例文の中にも人によって容認度が低いものがあり得る。本発表の主張は「こういう場合は必ず容認される」ではなく，容認される効果についての議論であり，発表者の容認度判断を基本に議論を進める。ドラフト段階で，本稿の中の 32 の例文について男性 6 名・女性 6 名の informant に容認度判断を依頼した。判定の仕方は 4 件法で，[5: 全く問題なし。]，[4:「？」まあいいかもしれない。なんかちょっとひっかかる。]，[1:「？？」かなり問題あり。]，[0: 全然だめ。日本語として明らかに間違い。]である。少ないデータだが，性別・年齢・方言の影響はなさそうである。本稿が容認としている例文で容認度データがあるものについては，全 12 名の informant の中で評価 5 をつけた人数と 4 をつけた人数を例文の最後に上付き表示で[5, 7]のように示す。また，「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の「少納言」で検索した限りでは，本稿中の例文に類する用例は見つからなかった。ある程度散見されるような使用方法であれば，先行研究で取り上げられているはずとも考えられるだろう。

4.1　「よく食べる」構文　（「よく食べる」効果）

☑ **(CL5)** 以下のような例から，「食べる，見る，使う」などの他動詞で願望形・可能形ではない場合でも「が/を」交替（ガ格目的語）が可能であることが分かる。これらを "「よく食べる」構文"，そして，その構文においてガ格目的語が容認されることを"「よく食べる」効果"と呼ぶことにする。

(11)a.カレーの方が よく食べる[7, 5]。　b.映画の方が　よく見る。　c.スマホの方が よく使う。

(12)a.カレーが 一番よく食べる[1, 8]。　b.日本映画が 一番よく観る[0, 7]。c.Word が 一番よく使う。

☑ **(CL6)** 全ての他動詞で「よく食べる」効果が得られる訳ではない（例：「押す，切る，起こす」）。

(13) a.*ボタンの方が よく押す。　b.*ニンジンの方が よく切る。　c.*太郎の方が よく起こす。

(14) a.* ボタンが 一番よく押す。 b.*ニンジンが 一番よく切る。　c.*太郎が 一番よく起こす。

☑ **(CL7)** 上記の例でヲ格目的語の場合は全て容認できるので，「よく食べる」効果が得られる・得られないは動詞と副詞句（または付加要素）の選択制限の問題ではない。（上の(13)(14)は意味的にあり得ない訳ではない。）

☑ **(CL8)** ガ格目的語が可能であるのは，「～の方が よく」あるいは「～が 一番よく」が固定化した慣用表現であるためではない。「よく食べる」効果は，様々な副詞句（または付加要素）のパターンで認められる。

(15) C の猫缶が よく食べるよ[3, 5]。（ペットの餌のアドバイス。「～の方が」/「一番」なしでも可。）

(16) a. C の猫缶の方が 食べる。　b. C の猫缶が 一番食べる。（「よく」なしでも可。）

(17) a. C の猫缶の方が たくさん食べる。　b. C の猫缶が (一番) たくさん食べる。
（「たくさん」は「よく」と同様に機能する。）

(18)A:アメリカに来て，全然食べてないの，何？　B:お米が 全然食べてない[2, 3]。（「全然」も可）

(注) 「猫缶の方が 食べる。」は副詞句の付加ではなく，目的語名詞句の延長であるため，「よく食べる」効果を副詞句の付加に限定できない。

(注) (18)の「お米が 全然食べてない。」は「お米が 食べてない。」でも一定の容認度があるので，容認度は「全然」だけの効果ではなく，否定形の効果もある。

☑ **(CL9)** 「よく食べる」構文においてガ格目的語が可能となる動詞であっても，動詞だけではガ格目的語は容認されない。「よく食べる」効果を得る（一般的な他動詞文でガ格目的語が可能となる）ためには，頻度・量・比較などの副詞句（または付加要素）が必要である。これは，これらの副詞句や付加要素によって出来事全体の状態性（状況性，習慣性）が高まるからだと考えられる。

➡ 「よく食べる」構文のガ格目的語成立には，他動詞以外の副詞句などが作用している。
（「他動詞によって目的語の格が決まる」とする文法理論に反する現象である。）

(19) a.*カレーが 食べる。　b.*映画が 見る。　c.*スマホが 使う。

(20) *ピアノが 弾いている。　vs.　ピアノの方が よく 弾いている[5, 6]。

◆動詞が同じであっても副詞句や付加要素によって他動性が変化するという例は Hopper and Thompson (1980)でも議論されていないが，他動性仮説の中の「意志(volition)」のパラメータで説明することは可能である。「カレーを食べる。」などは意志(volition)を伴う行動であるが，「よく食べる」構文の「カレーの方が よく食べる。」などは状態・状況・習慣についての事実の描写であって，文そのものは意志を伴う行動を表すものではなくなっている。

（注）概念/用語の適応性の問題であるが，発表者は[他動詞・自動詞・形容詞・名詞]を[動的⇔静的]という軸で捉え，「他動性が低くなる」という表現は使わず，「状態性が高くなる（より静的になる）」を使う。

5.「よく食べる」効果の更に詳しい検証

☑ **【副詞句の種類】(CL10)** 頻度・量などの副詞句があれば常に「よく食べる」効果が得られる訳ではない。比較/選択/識別など，総記の「が」が機能するコンテクストが必要（必要条件）。

(21) a.ピアノの方が よく弾きます。　　b.ピアノが 一番よく 弾きます。

(22) a.ピアノが　*いつも/*毎週/*たまに/*時々　弾きます。（「いつも/毎週/たまに/時々」は不可）

(23) a. ?いろいろ試してみたけど,やっぱり C の猫缶が 毎日 食べるよ。（「毎…」で容認度アップ？）

b. ?20 本ぐらい持ってるけど，やっぱりこのアコギが いつも 使うね。

（ミュージシャンの話。「いつも」で容認度アップ？）

◆この容認度の違いは目的語の限定性によるものと考えられる。Kuno (1973)は「が」の機能を neutral description（中立叙述）と exhaustive listing（総記）の 2 つに分類しているが，中立叙述のガ格名詞句は主語となるため，「が/を」交替（ガ格目的語）は起こらない。ガ格目的語の「が」は総記ということになるが，総記の機能は或る候補群/選択肢の中から 1 つを選択/識別するというコンテクストが前提となる。上の(21)の場合，「特定の楽器と比べて」または「或る楽器群の中で」という前提が明確に感じられ，総記の「が」が成立する。一方，(22)はそのような前提が不明確であり，「（他の存在を前提とせず）ピアノについての話」となるため総記の「が」が成立しないと考えられる。

（注）これも用語の問題であるが，発表者は exhaustive listing よりも selective や identifying の方が適切ではないかと考える。[可能形/願望形/好き/嫌い/欲しい/出来る/分かる]に対するガ格対象語もこの「が」であると説明できる。

☑ **【否定の効果】(CL11)** Hopper and Thompson (1980)の他動性仮説によると，否定形は肯定形よりも他動性が低くなる，言い換えると状態性が高くなる。しかし，「よくできる」効果を得るためには否定形だけでは不十分で，頻度・量・比較などの副詞句（または付加要素）が必要である。

(24) a.*ピアノが 弾く。　<　?*ピアノが 弾かない。　<　ピアノの方が　全然弾かない。

(25) a.*算数が 勉強する。　<　?* 算数が 勉強しない。　<　算数が 一番勉強しない[3, 6]。

(26) a.*日本映画が 観る。　<　?* 日本映画が 観ない。　<　日本映画が 一番観ない。

☑ **【テ形による Aspect の効果】(CL12)** テ形用法の中には状態性が高いものがあるが,「よくできる」効果を得るためにはテ形だけでは不十分で，頻度・量・比較などの副詞句（または付加要素）が必要。

(27) a.*ピアノが 弾く。　<　*ピアノが 弾いている。　<　ピアノの方が　よく弾いている[5, 6]。

(28) a.*算数が 勉強する。　<　* 算数が 勉強している。　<　算数が 一番勉強している[1, 8]。

(29) a.*日本映画が 観る。　<　* 日本映画が 観ている。 < 日本映画が 一番たくさん観ている。

☑ **【目的語と動詞の隣接性】(CL13)** 実質的な目的語名詞と動詞が隣接していると「よく食べる」効果は得られない。副詞句などによる一定の距離が必要。（距離が長いほどいいという訳ではない。）

(30) a.ピアノが 一番よく 弾きます。　→　*一番よく ピアノが 弾きます。（隣接は不可）

b.カレーが 一番たくさん食べます。 →　*一番たくさん カレーが 食べます。（隣接は不可）

(31) サッカーやってると，膝が 一番よく痛めるね。/ *一番よく 膝が痛めるね。（隣接は不可）

(31) ?ジョギングの方が します。 → ジョギングの方が よくします。（副詞句追加 容認度アップ）

(32) ?英語が 旅行で 一番よく使う。→ 旅行で 英語が 一番よく使う。（距離短，容認度アップ？）

(注)「～の方が V」は実質的な目的語名詞と動詞が既に離れた形になっており，副詞句なしでも容認できる場合がある。
(注) 上の(CL13)は，Shibatani (1975)・柴谷 (1978)が願望表現における「が/を」交替に関して指摘した現象と逆のパターンである。願望表現ではガ格目的語と動詞の距離が離れるほど容認度が下がる。しかし，この隣接性の現象は可能表現では観察されないため（遠距離のガ格目的語も容認），柴谷の分析は「が/を」交替全般には当てはまらない。(例：太郎は ロシア語が/?を ネイティブのスピードで 流暢に話せる。)

☑ **【格表示について】(CL14)**「一番よく」や「一番たくさん」などの副詞句で「よく食べる」構文が成立する場合，「一番よく食べる」など，副詞句と動詞を合わせた動詞句が目的語のガ格表示を成立させていると考えられる。例えば，「*一番よく C の猫缶が 食べる」のように副詞を前方移動すると，動詞句が分解しているため，ガ格目的語が容認されなくなる。

◆一方，「C の猫缶の方が 食べる」の場合，「～の方が」は目的語名詞句の一部であり，述語動詞の「食べる」が単独でガ格を与えているという説明は矛盾を生じる（「食べる」はヲ格を与える）。

◆「C の猫缶の方が たくさん食べる」の場合，目的語名詞句の一部である「～の方が」と動詞句の一部である「たくさん」はそれぞれ単独でも「よく食べる」効果をもたらすことから，併用した場合は両方がガ格表示に関与していると考えられる（併用した方が容認度は高い）。

◆以上をまとめると，「よく食べる」構文は目的語の格表示に関して以下の 2 つの知見をもたらす：

① 目的語の格は他動詞によって決まるとする従来の分析に対し，副詞句を含めた動詞句がガ格表示を成立させていると解釈すべき場合がある。

② 目的語名詞句の構成要素がガ格表示を成立させている，あるいは関与していると解釈すべき場合がある。(「～の方が」単独，または併用)

6. 総記の「が」との関係性

☑ **【総記の「が」との関係性 1】(CL15)**「よく食べる」構文におけるガ格目的語の「が」は総記の「が」であるが，総記の「が」単独では「よく食べる」効果は得られない。状態性を上げる付加要素が必要。

(34) *何が する？　→　?ヒマな時，何が 一番よく する？[0, 3]（容認度アップ？ ヲ格は可）

(35) *何が 食べる？ →　お腹すいた時，何が 一番よく 食べる？[2, 3]　（容認？）

(36) *どっちのゲームが しますか？　→　どっちのゲームが よくしますか？[0, 6] (容認?)

☑ **【総記の「が」との関係性 2:「よく食べる」構文/効果の適用拡大】(CL16)**「よく食べる」構文/効果の説明は，ガ格目的語に限らず，他の(格)助詞とガ格の交替現象にも適用できる。つまり，付加要素によって状態性が上がることが必要条件である。

(37) a.末っ子に 弁当を 作ってあげる。　b.* 末っ子が 弁当を 作ってあげる。(二格での解釈不可)

→ c. ?家族の中で，末っ子が 一番よく 弁当を 作ってあげる[1, 3]。(容認？)

(38) a.イオンで 買い物をする。　b.* イオンが 買い物をする。(場所格の解釈不可)

→ c. スーパーだったら，イオンが 一番よく 買い物をします[3, 4]。(容認？)

(39) a.ケンちゃんと 一緒に遊ぶ。　b.* ケンちゃんが 一緒に遊ぶ　(「と」解釈不可)

→ c. ケンちゃんが 一番よく一緒に遊ぶ[5, 6]。(容認)

(注) 上記のような総記の「が」は「NP にが/でが/とが/までが/からが」など，他の助詞と共起し得る。上の(37)(38)(39)では，「末っ子にが」「イオンでが」「ケンちゃんとが」は全て容認される。

☑ **【「よく食べる」効果 revised】(CL17)** 他の助詞と入れ替える形で，あるいは，他の助詞に付加する形でガ格が使えるようになるには，副詞句などの付加要素によって文が表している出来事の状態性が上がることが必要である。状態性によるこの効果を "「よく食べる」効果" と呼ぶことにする。

(40) a. 公園を走る。　b. *公園が 走る　c. 公園が 一番よく走る。　(移動動詞のヲ格)

(41) a. 京都に 行く。　b. *京都が 行く　c. 京都が 一番よく行く。　(目的地の二格)

(42) a. 母に 怒られた。 b.*母が 怒られた。　c.?母の方が よく怒られた。

d. 父にも母にもよく怒られた。 母の方が よく怒られた[5, 7]。　(受身の二格)

(43) a. アンパンマンの食器で 食べる。　b. *アンパンマンの食器が 食べる。(幼児の食事)

c.トーマスとアンパンマンだったら，アンパンマンの食器の方が よく食べる。(道具のデ格)

(44) a. 家で 食べる。　b. *家が 食べる。　c. 家の方が たくさん食べる[6, 4]。　(場所のデ格)

7. 結論と今後の課題，発展性

☑ **【結論】**: 冒頭に提示した，(CL1)，(CL2)，(CL3)

☑ **【課題，発展性】**: 用例収集; ガ格の機能と格表示; 英語の middle construction との類似性。

【参照文献】 Bossong, G. (1985) Empirische Universalienforschung; Differentielle Objektmarkierung in den Neuiranischen Sprachen. Tübingen: Gunter Narr Verlag./ **Comrie, B. (1989)** Language Universals and Linguistic Typology, revised ed. Chicago: University of Chicago Press./ **Hirata, Y. (2002)** Development of Semantic Theme Markers for Desiderative Predicates in Japanese. In *Japanese/Korean Linguistics, Volume 11*, ed. P. Clancy, 135-148./ **Hopper, P. and S. Thompson (1980)** Transitivity in Grammar and Discourse, *Language 56*, 251-299./ **Kuno, S. (1973)** *The Structure of the Japanese Language*, Cambridge, MA: MIT Press./ **Shibatani, M. (1975)** Perceptual strategies and the phenomena of particles conversion in Japanese. In *Papers from the parasession on functionalism*, 469-480. Chicago: Chicago Linguistic Society./ **Takahashi, M. (2010)** Case, phases, and nominative/accusative conversion in Japanese. In *Journal of East Asian Linguistics 19*, 319-355./ **Takano, Y. (2003)** Nominative Objects in Japanese Complex Predicate Constructions: A Prolepsis Analysis. In Natural Language & Linguistic Theory, Volume 21, Issue 4, 779–834./ **梅田遼 (2017)**「フィンランド語の非定形節における主格目的語」日本言語学会 154 回大会予稿集, 182-187./ **柴谷方良 (1978)**『日本語の分析』大修館書店./ **渋谷勝己 (1993)**「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』, 33 巻, 1 号, i-262./ **菅井三実･成瀬厚司 (2006)**「希望表現における対象 NP の格標示に関する覚書」兵庫教育大学研究紀要, 第 29 巻, 49-57./ **南部智史 (2014)**「コーパス言語学および実験言語学に基づく格助詞交替の分析」大阪大学博士論文./ **藤村逸子 (2009)**「他動性再考:「被動作主」を表示する「が」と「を」の交替」, *Asia and African Studies XIII*(1), 73-112./ **松村明 (1957)**「「水を飲みたい」という言い方について」,『江戸語東京語の研究』